

DHARMA EYE



法眼

ご挨拶

河村松雄

曹洞宗宗務庁・教化部長

『Dharma Eye』を御購読の方々におかれましては、ご清祥の御事と拝察申し上げます。又、平素からの格別のご愛読に、改めて御礼申し上げます

禅は日本の文化に多大な影響を与えてきました。絵画・作庭・建築・文学・茶道・書道・剣道・芸能・ことば、そして日本人の生活様式そのものの中にも禅の教え、考え方の影響が見られます。

日本の伝統文化を代表するものの1つとして能があります。その能を大成した世阿弥 (c. 1363-c. 1443) も、曹洞禅を日本に伝えられた道元禅師の教えの影響を受けているといわれています。その世阿弥が著した能の理論書ともいべき書である『風姿花伝 (花伝書)』には、明らかな禅の思想の影響を読み取ることができます。又、文化や芸術以外にも、朝起きて「歯を磨き、洗顔する」という日常的な習慣や食事作法においても、禅寺で雲水 (修行僧) たちが修行の一環として実践していた事が、民衆の間にも広まったものといわれています。

このように、日本文化に影響を与えてきた曹洞宗の教えは「高い精神性」と「誰もが実践できる日常性」という二つの特質を兼ね備えているといえましょう。そして、その教えへの関心が世界中に広まっているのも、その特質のためではないでしょうか。

私が教化部長を仰せつかった時に、心に決めた事が2つございます。1つは檀信徒に対する布教教化資料の件。これは宗門からの資料を「より良い物にして欲しい」という意見が多く寄せられている事に端を発します。2つ目は、今まで内向きに行ってきた布教教化を、社会に対する布教教化にするという事です。

その中で、現在の曹洞宗宗務庁では、曹洞宗の教えを世界に広める手段の一つとして、英語版教化資料『Zen Friends』(以下『ZF』)、ポルトガル語版教化資料『Caminho Zen』、スペイン語版教化資料『Zen Amigos』の3種類を定期刊行物として出版してまいりました。

マハトマ・ガンジー (Mahatma Gandhi, 1869~1948) 曰く「世界の変革を望むならば、まず自分自身が変革そのものであれ!」とあります。約15億人がインターネットを使用している今日の状況を鑑み、これらの定期刊行物を多言語による電子出版へと移行してまいりたいと存じます。英語を始め、スペイン語・ポルトガル語・フランス語・ドイツ語・イタリア語の計6ヶ国語を予定しております。

曹洞宗のホームページ上に、宗門の根幹となる部分の翻訳は、英語のみとなっておりますが、まずはその部分を各国語に翻訳し、各地域の情報等を掲載すると共に、将来的には『正法眼蔵』等の宗典や経典の翻訳等をも掲載してまいりたいと存じます。

今後、ウェブサイトとして大きく発展した形で情報を発信することにより、誰もが自由にホームページにアクセスできるようになります。そして『ZF』がお伝えしてきましたメッセージを、世界中の方々にお届けする事ができ、尚且つ、今までの冊子形態では十分にお伝えしきれなかった様々な情報も盛り込む事ができます。大きな潜在性を秘めたWeb版『ZF』によって、私達は、仏教・禅、そして何よりも曹洞宗に関心を寄せる全ての人々に向けた情報発信の場とすることを目指しております。『Dharma Eye』のご購読と併せまして、こちらのWeb版『ZF』も楽しみにお待ち頂けたら幸いです。

「『古仏にまねぶ。』という諺があります。これは、『学ぶ』と『真似る』を一緒に、といった意味です。私どもは祖師方の教えに問いかけ、その努力を継続するということが大切であると思いますので、仏の道を共に歩んで行きたいと思っております。

高祖道元禅師様、太祖瑩山禅師様の教えが、みなさまお一人お一人の「心のささえ」「人生の指針」となりますよう、心から祈念致します。

南無釈迦牟尼仏

ブラジル ローランジャー佛心寺 開山45周年記念法要 第3回南米摂心 モジ禅源寺50周年記念行事を終えて

黒澤慈典

ローランジャー佛心寺国際布教師

1. ローランジャー佛心寺開山45周年記念法要

ブラジルでの国際布教師に就任してから、2年余りが経った。最初の一年間はサンパウロの両大本山南米別院仏心寺に駐在していた。その間に、当山中興開山である故吉田道元大和尚の寺族である、宮城県洞林寺と拙僧の祖師匠との不思議な縁により、2004年4月より当地ローランジャーでの活動が始まった。そんな中、就任し1年余りで、佛心寺開山45周年という一大イベントに遭遇し、未熟非才な拙僧が主人公を果たさなくてはならぬ日がやってきた。

当日は好天に恵まれ、宮城県洞林寺参拝団御一行（団長・長崎県西蓮寺住職茨木兆輝老師）、采川道昭南アメリカ国際布教総監老師を始めとする南アメリカの各国際布教師、三好晃一前南アメリカ国際布教総監、三浦信英特派布教師など、日本、北米から15名の僧侶のご随喜をいただいた。また、地元ローランジャーの檀信徒の殆どが参列し、地元新聞社2社の取材もあり、当山にとっては何十年ぶりに盛り上がりみせた一日ではなかったかと思う。

法要は開山歴住諷経（導師・三好晃一前総監）に始まり、檀信徒総回向（導師・黒澤慈典）、説教・法話（三浦信英特派布教師）、最後に当山開山45周年慶祝法要（導師・采川道昭総監）を厳修し、祝辞、祝電の後、全員で記念撮影、当山開山45周年記念法要は無事円成した。引き続き、当山檀信徒会館にて昼餐会、そして夜は地元レストランにて祝賀会を催し、45周年記念行事は進行していった。

翌日午前3時、昨晚の祝賀会で盛り上がり多少の疲労を浮かべながらも、宮城県洞林寺参拝団御一行は当山へ最後の拜登をされ、一人一人恭しく線香をあげローランジャーを後にした。今から45年前、中興開山故吉田道元大和尚のご寺族として、長らく当山にて暮らしておられた吉田ふく子氏にとっては、ここローランジャーは故郷同然であり、感動とかつて親しかった地元の方々との別れを惜しみつつも、喜びに満ちておられた。夜がまだ明けぬ暗い中、御一行は当山境内を後にした。

当山は長らく国際布教師不在の状態が続いており、何人かの檀信徒の間では、忘れられたお寺となっていた。そのような状況の中、5年前の開山40周年記念行事は、宮城県洞林寺参拝団と当山護持会により営まれたそうである。かつて南米には国際布教師不在、または国際布教師がいても機能していない寺院がいくつか

存在したという。法要や参禅会、日本文化を取り入れた行事を行うことは、国際布教の基本的な姿勢である。今後は南米の国際布教師の協調性、連帯性をさらに確立し、互いが切磋琢磨する必要があると思料する。

この度の法要は、地元ローランジャーの檀信徒も、今回遠路よりご参拝くださった宮城県洞林寺参拝団御一行も、満足と感動に満ちていた。このような行事を行うことができ、深い法悦を味わうことができたことに感謝している。今後は開創50周年という大きな節目に向けて、気持ちも新たに日々の行持を勤めていきたい。

2. 第3回南米摂心

45周年記念行事に引き続き、第3回南米摂心5日間の日程が当山を道場に修行された。記念法要から一転し、早速摂心の準備にとりかかった。当山を道場にご指名頂いたことは誠に悦ばしいことであったが、宿泊などの設備が整っていないことから、近隣のペンションを宿泊所とした。

今回の修行者は僧侶10名、参禅者30名と、例年と変わらない修行者数であった。参禅者の多くはサンパウロからの参加で、地元ローランジャーでも参加を呼びかけたが、4名と少数であった。やはり地域の差であろうか、当地では「坐禅」そのものを理解する人が少なく、当山でも日曜参禅会を行っているが、興味を抱く人は少ない。近くのロンドリーナの街で「坐禅」を知る人はある程度いるが、当山へ赴き坐禅を修行する者は少数である。今回の参加者の多くはサンパウロ両大本山別院仏心寺、天隋禅堂（ソーザ・孤圓国際布教師）からの修行者が大半を占めた。

9月5日（月）午前10時より受付を開始し、引き続き開講式、オリエンテーションと進み、中食後から摂心に入った。今回（例年もそうであるが）一炷30分とし、経行5分、抽解10分としている。一部の僧侶からは「これは摂心ではない」といった意見も伺った。しかし、実際一炷40分とし、飯台後も早速止静というように日本の僧堂に準じた桎梏な差定は、ブラジル人参禅者にとって苦痛であることも事実である。しかし、このような比較的余裕のある差定でも、摂心に取り組む参禅者一人一人の真摯な姿は見えていたと思う。つまり、その国の民族性や文化にあった修行法を考えることは重要なことである。

振鈴に始まり、開枕までの間も、また就寝の間も常に24時間共に過ごす姿勢こそ、「大衆一如」本来の修行の形が出来上がっていくものであるが、当山に宿泊設備が無いという点では、不便はもちろん正伝の修行を布教するには足りないことを痛感した。しかし修行者の多くは満足し、今後における禅の実践に大いなる糧となったことは事実である。

今回の参加者（ブラジル全体における禅の修行者）についてだが、当山ローランジャー佛心寺にて毎週行っている日曜参禅会にメンバーは、空手を実践したり、ヨガを行ったりと、総合的に、落ち着き、静寂を求めて坐禅を修行している者が目立つ。このよ

うに、坐禅を全て行事として、行鉢はもちろん、作務を通して日常の日課実践としての坐禅、そして提唱等理論的な部分、また教育的な面に触れる事に対しての経験が無い方々が多数である。今後は24時間を通しての「大衆一如」となった摂心を経験させることが重要であると痛感した。

3. モジ禅源寺50周年記念行事

当山45周年記念法要、第3回南米摂心に引き続き、ブラジルで曹洞宗最古の寺であるモジ禅源寺50周年記念行事が、9月11日(日)に修行された。

モジはサンパウロから車で約1時間の郊外に位置し、日系人の多い町である。ローランジャーは農業を中心として発展した北パラナ州の一角の町であるが、モジは商業で成功を納めた日系人が多く住む町である。また、サンパウロ中心部より車で1時間とアクセスが良いため、人も集まりやすい。近郊には日系の企業等も多く存在し、ブラジル全土の中でも日系人の多さでは上位を占める町である。

さて、法要前には大梵鐘が鳴り響き、大勢の稚児行列が行われ、お稚児さんの多くは日系人の子どもであった。

法要は、50周年慶祝法要(導師・采川総監)、開山歴住諷経(導師・三好前総監)、檀信徒総供養(導師・佐藤鴻舟師)が行われ、約250名の檀信徒が参列した。三浦信英特派布教師による説教の後では、禅源寺会館にて昼餐会を催し、お開きとなった。

南アメリカ国際布教総監部においては、この1週間は節目となる一大行事が続いたが、無事円成することができたことに、多くの方々の尽力、ご厚誼と共に佛天の御加護と感謝の気持ちで一杯である。来年、2007年にはサンパウロ別院仏心寺開山50周年記念行事も控えている。今後、多くの行事を執り行っていくにあたり、国際布教師をはじめ現地僧侶、檀信徒が力をあわせ、協調し連帯性を保ち益々の発展を願い、擲筆させていただく。

2005年曹洞宗研修会

テンブロー天龍

ドイツ・寂光寺

去る10月14、15日、寂光寺においてドイツ初の2005年曹洞宗ワークショップが開催された。天候は両日とも明るく澄んだ秋日和で、古くからの修行者仲間や友好的な関係のある外国の禅指導者たちがわれわれと一緒に寂光寺の日常的修行をおこなう素晴らしい機会であった。

今回のようなスタイルと形式でワークショップがおこなわれたのは初めてのことであった。参加者全員が一緒に坐禅、朝課、応量器を用いての道場での朝食を修行した。坐禅、朝課、朝食

のあとはほとんどの時間が学習、講習、交流のために用いられた。今村総監老師には葬儀の歴史的起源について多くの貴重な情報と資料を提供していただき、いかなる質問にも驚くほどの力量をもって答えていただいた。また横山泰賢師、フォルザーニ・慈相師による正確な通訳と自然で有益な支援にも甚深の感謝をする次第である。これに加えてすべての参加者が開かれた心と注意深さをもって臨んでくれたので、たいへん心のこもった雰囲気なかで有意義な交流をすることができた。提唱のあと、今村老師は道場において葬儀のさまざまな場面でおこなわれるほとんどの所作のデモンストレーションをおこなわれた。老師は上品さと自然な気楽さをもってそれをおこなわれ、求めに応じて何度も繰り返し実演をしていただいたので、誰もが自分でそれを練習することができるだけの基礎を得たと感じることができた。それは将来それぞれのコミュニティで洗練され使われていくだろう。

道場でだけではなく研修の全期間にわたって、われわれは今村老師の自然でへりくだった、友好的かつ毅然とした態度をつよく感じることができた。そのおかげでコミュニケーションはきわめて容易にまたスムーズにおこなわれた。寂光寺のコミュニティにとって、今回の出来事は今村老師や他のヨーロッパの禅指導者たちに会う絶好の機会となった。それらの人々を迎え参加者全員の世話をさせていただくことは「課せられた仕事」ではなく高い価値をもつ幸運な出来事であった。それはわれわれ一人一人のなかに豊かな感情を生み出し、ポジティブで統一されたエネルギーを深く感じさせてくれたのである。

寂光寺からベルリンにもどってきたとき弟子の夫が三日前に亡くなったばかりだった。翌朝、われわれは火葬場に行った。開かれた棺の前で線香をあげ般若心経を唱えたあと、寂光寺で初めて習った新しい回向を読んだ。そして棺のふたが再び閉じられ火の中へと運ばれた。この絶対で明白なりアリティの瞬間、そこにはただ炎だけがあつた。しかし、言葉を越えた不可得の世界は厳然として在りわれわれの体のあらゆる部分と全空間を貫いている。誰もそれを否定することはできない。一つのサイクルが完結しそしてまた新しいサイクルが始まるのだ。寂光寺以前の日々とのつながりをこれ以上強くなりようがないほど感じた。

こうした集まりやワークショップが今後とも継続していくことを強く希望している。われわれが取り組むべき課題とは別に、少なくともコミュニケーションの真の共通基盤は常に「生死の一大事」である。この生と死の基盤は、どの日においてももどの人にとっても、非常に大きな基盤であり、お互いの永遠の公案である。その基盤の前に立てばわれわれは人為的な理解や行動を投げ捨てて自分自身になることができる。こういう見通しにおいて、まだわたしの記憶に生々しく生きている十月の集まりを思い起こしつつ、寂光寺で貴重な時間をわれわれとともに過ごしていただいたすべての参加者に感謝の気持ちを捧げたい。またみなさんと会える日が来ますように。

合掌

L. 天竜

山に登ること

フマガリ泰悟 イタリア普伝寺

新居浜駅で妙光さんとわたしはタクシーに乗りました。「瑞応寺でしょ」と白い手袋をつけたタクシーの運転手は言いました。わたしたちが着ている着物から推測してそう言ったのでしょうか（僧侶らしくみえるのは目つきよりも身ごなしなのです）。さて、もうしばらくすれば伝道教師研修所に入所するためにわれわれは寺の門を通りぬけることでしょうか。

タクシーは建物やスーパーマーケット、ガソリンスタンド、お店の立ち並ぶ新居浜の通りへと出発しました。光や情報を家庭に送り届けている電線が迷宮のように入りこんで走っていることと広告のためのネオンサインの色（青、緑、ピンク、やさしいパステルのような色）が作り出す雰囲気のほかにはびっくりするようなものはありませんでした。最初に見たものが第一印象になります。

突然、われわれの目の前のフロントガラスに映る景色が変わりました。家のかわりに木が見え、道が（まだわれわれの眼には入りませんが）寺のある山へと向かって上りになりました。険しい道を上りきると寺の裏口に着きました。それはわれわれの右側にあり、左側には学校のような建物がありました。庭は踏み固められた地面になっており建物の周りは木で囲まれています。そこここに子供のゲームが置いてあるのが見えました。きっと幼稚園なのでしょう。

重いスーツケースを押して受付のように見える場所に向かいました。そこは頭上が大きく開いていて、千利休の茶室を思わせました。しきたりにしたがった挨拶を終えると若い僧侶が同輩にわれわれを宿舎に案内するようと言いつけました。そこは法堂の左側で僧院の建物の西の端にあります。お寺には誰もいないように感じられました。午前10時だというのに、雲水たちはどこにいるのでしょうか？

豊かな植物で覆われた山（それは寺の北側を守っています）の方から鳥の鳴き声となにか耳障りな金切り声（後になってそれは猿だとわかりました）が聞こえてきました。南の方からは、町の騒音ではなくスピーカーで住民に何かを知らせる声と太鼓の音が聞こえました。次の日になって、そういう放送は振鈴の直後である朝の4時にもう始まることを知りました。こうした音のただなかに、まったくの静寂に包まれた寺、参道、さまざまな色、屋根、腕木、畳、どこにいくためのものかわからない山へと深く分け入っていく二匹の石の獅子に守られた階段などがありました。

寺に到着したことでひき起こされたいろいろな感情とこの場所の雰囲気によって刺激されて湧いてくる驚きや好奇心のせいでわれわれは荷物の横でぐずぐずしていました。しかし、そうした感情にひたることも、庫院に昼食を食べにくるようという指示で中断されました。こうしてわれわれは寺の中心部へと入

り大衆と顔をあわせたのです。この昼食を経験したことで今回の安居全体を貫くある決意をしました。それはなんとしてでもこの形式とリズムに従うということです。そして、刻々、毎日、どの修行についても、やるべきことにしたがってそういう努力をしました。坐禅、会議、儀式の勉強、作務、仏道修行に没頭している大衆とのミーティング、着衣、食事、そして法にかななった生活。それはわたしの師である泰天・グアレッキが普伝寺において提案し奨励しているのと同じ、あたりまえの日常生活です。

しかし、弟子丸泰仙老師がヨーロッパについてから40年、普伝寺が創設されてから20年がたち、いくつかの「変奏曲」が現れ、地域の宗教的・文化的伝統と抵触しないある特異性をもった日常的修行の形態が始められました。その良い例はお経の唱え方です。詩的なイタリア語に翻訳されたお経はリズムも調子ももっと簡素な仕方では唱える必要があります。「変奏曲」は時にはそういうものとして理解されるときもあれば、「相違」として理解されることもあります。それは、たとえ仙芳さん（日本人の両親のもとアルゼンチンで生まれそこで育てられた僧侶）がわれわれはみんな同じ摩訶般若波羅密多心経を唱えると言っても、やはり「変奏曲」はお互いを隔てる力を持っているからです。この「相違」の問題は瑞応寺の人たちとのミーティングでもしばしばテーマになり、講師や曹洞宗の人たちとの議論のテーマにもなりました。意見交換のときある若い雲水が、もしかしら日本における禅の将来に対する不安を表そうとしたのか、あるいはわれわれに向けての親切な励ましだったのかもしれませんが、「もう一世代も立たないうちに永平寺で西洋人の禅師が誕生するかもしれませんね」と勇気のある発言をしました。わたしも質問をしました。すこし失礼だったかもしれませんが…。「永平寺の禅師は日本人ですかそれともただ禅師ですか？」

一つ確かなことがあります。いくつかの例外を除いて瑞応寺の雲水たちは禅僧の若い息子たち（20歳から30歳の間）で、自分たちは後継者であり寺のあとを継ぐものだと考えています。西洋の国々においては仏法の学習や実践にとりくもうとする人たちはキリスト教やユダヤ教、在家、無心論者、不可知論者、無政府主義者などからなる多様な世界からやってきます。そして瑞応寺の雲水たちのように若くない場合がしばしばです。しかし、かれらはみんな人生の意味や癒し、補完的な治療法、幸福などを求めている冒険者たちなのです。

彼らのために何ができるのでしょうか？その答えは一義的なものではありません。それは明確に表現されるべきであり多様であるべきです。さまざまな伝統の要素を組み合わせ統合したものでなければなりません。それは何世紀にもわたるプロセスを経る必要があります。

瑞応寺の若い導師、堂行、雲水たちがわれわれを観察したのと同じくらいわれわれも彼らを観察しました。言語的な壁のためにコミュニケーションをとることはできませんでしたが、さまざまな活動をしているときにはボディ・ランゲージ（身振り言葉）が大事にされ、わたしがそのなぞめいた魅力に魅せられ

て遠慮なくじっと見つめている彼らの顔が次第に意味を表し始め、漠然とした何か（兄弟同士のような受容の雰囲気、同じ運命を分かち合っているというような感じ）を伝達し始めたのです。

だんだんと日を追うにつれて僧院の建物全体が一つの有機体であるかのような姿を現していきました。そこでは古いものと新しいもの、生と死が如法のスタイルの香りのなかで調和しながら共に息づいているのです。色、木、形、音、臭い、幼稚園、お墓、寺を囲む木に太った蜘蛛がつくった巨大な蜘蛛の巣（夏の終わりなのにまだいる蚊から寺を守ろうとしているかのようでした）…。瑞応寺はわたしにお袈裟のことを思い出させます。「われわれの人生を刻々に静かに継続させていくためにリアリティの絶え間ない流れのなかに深く飛び込むことを可能にする」のはほかならぬお袈裟なのです。

今村老師に尋ねました。「ヨーロッパで伝道教師研修所を開く条件がそろっていますか？」彼は「専門僧堂があるという条件つきでなら」と答えました。わたしは眼を閉じました。するとそこに宇宙的な伝法のしるしである巨大なお袈裟が大きくかつ穏やかに現れました。

研修所の経験が終了しようとしていました。伝道教師を目指すわれわれのために設けられたカリキュラムを瑞応寺の日常生活にうまく組み入れるという試みは成功しつつありました。いまや最後のテストがわれわれを待ち受けていました。それは曹洞宗の創始者たちにお参りするために永平寺と總持寺に拝登することです。

瑞応寺との別れは友愛に満ちた心温まるものでした。優れた堂頭である榎崎通元老師に最後の挨拶をし、雲水たちに合掌と抱擁をしました。わたしは「あなたの示してくれた実例と修行はわたしに力と勇気を与えましたよ」とある雲水にささやきました。「あなたもね」と彼は答えました。

再びわれわれは新居浜駅に重いスーツケースを持ってやってきました。それはもう一つの別れ、別離でもありました。われわれの通訳であり儀式的先生であり外の世界とわれわれの接点でもあった大岳さん（6フィート半の長身から世界を見下ろしているアメリカ人）がわれわれとは別なところへ旅立とうとしていたのです。ありがとう、大岳さん。新しく伝道教師の資格を得たわれわれ一行は電車に乗って京都へ行きそこに2日泊まりました。それから拝登の儀式のために、まずヨーロッパ人組は永平寺に行きアメリカ人組は総持寺に行き、そのあと場所を交代しました。

親愛なる妙安さん、義玄さん、健仁さん、妙光さん、青月さん、そして愛語さん。われわれは出会って5週間の間同じ場所で同じスケジュールで同じ日常生活をすごしました。喜びと苦しみは同じではありませんでしたが…。そして別れました。われわれは思慮と機転をおおいにはたらかせて連帯の雰囲気をつくりそれぞれの特徴に敬意を払うような親密な関係を織り上げました。みなさんにまた会うことができますように。道元禪師

の『正法眼蔵』のいくつかの巻についてすばらしい注釈をしてくださった講師の先生方、われわれのまわりに付き添ってくださり、いつもよろこんで願いを聞き届けてくださった宗務庁のみなさまにもまた会えますように。

あれから1ヵ月後の今日になっても、5週間に及ぶ研修所の経験の記憶はまだわたしのなかに生々しく残っています。それらの経験をまったく同じように反復するでしょう。師よ、あなたの親切、あなたの測り知れないほどの慈悲、そしてわたしが曹洞宗を創設した人々に礼拝することができるというあなたの洞察力に感謝いたします。ここに九拝して感謝を捧げます。

伝道教師研修所報告 2005年秋

オースティン義玄

アメリカ・サンフランシスコ禅センター

わたしはここ数年、宗務庁から伝道教師研修所に参加しないかというお誘いをずっと受けていました。けれども、サンフランシスコ禅センターでの任を負っていたため、理事長の任期が終わるまでアメリカを離れることができませんでした。本年その任期が終了したので研修所に参加することにしました。次に自分が何をするかを決める前に、ここで自分の修行を見つめ直してみよう、仏法についてよく考えなおしてみようと思って日本へ行きました。ここ数年の間、人々はわたしに彼らと一緒に法の灯をつけてくれませんか頼み続けてきました。わたしが研修所に参加することで弟子たちのためにより豊かな場と機会が得られるだろう、自分が坐禅をし学び働くサンガを充実させることにつながるだろうと思いました。

瑞応寺に来て、自分がさまざま色、形、リズムをもった複雑な図柄の曼荼羅の一部であることがはっきりとわかりました。中心には、毎日わたしたちが内に向かって照らす一つの同じ光がありますが、研修生が1ヶ月の間学ぶことができるように仏・法・僧の諸側面を維持するべくたくさんの人たちが懸命に働きました。

サンガの中にサンガがあり、またサンガから生まれてくるサンガもありました。鈴木老師の法系に属する他の3人のアメリカ人と弟子丸老師の法系に属する3人のヨーロッパ人と一緒に生活することで、わたしはサンガの親密さについて新しい経験をすることができました。わたしたちの周りでは瑞応寺に安居中の雲水さんたちが道元禪師のやり方を全力を尽くして示してくれていました。瑞応寺の役寮さんたちは瑞応寺を模範として保つために彼ら自身の寺のメンバーの支持を得て何週間もの時間を割いてここへやってきてくれていることにわたしは気づいていました。研修所を容れる容器となってくれた宗務庁のスタッフや運営担当者の方たちは世界各地から来てくれました。曼荼羅の中にあるパターンのように、大小のサンガがすべて短い

時間のあいだひとつのリズムを作っていたのです。

研修所は文化についての教育を行ってくれました。1ヶ月の間、さまざまな親切な手と声が多くのをわたしたちに与えてくれました。印刷された翻訳、お茶碗、御詠歌の道具、カメラ、ほうき、下駄、お弁当、お金、法衣用の帯、香包み、写真、文殊、汽車の地図、みかん、教え、謝罪、書、絡子など…いまあげたのは全リストの百分の一にも満たないくらいです。それぞれのいただき物はどれもわたしが見、感じ、味わうことができる伝統をうちに含んでいました。曼荼羅のなかの色のように、淡いものとくっきりしたものとの対象が調和しあいながら全体のなかでそれぞれの場所を占めていました。

毎日、瑞応寺と宗務庁の先生たちがわたしたち研修生が修行の型についての理解をより洗練していくように手助けをしてくれました。朝食のときに五つのお椀をどのように使うのが正しいのか？足袋やべっすをはくのはどういう時なのか？瑞応寺、永平寺、総持寺それぞれの寺でお袈裟、坐具、笏、弘子をどのように身につけまはすのか？異なった寺から来た7人が日中諷経をうまく協調してやれるのか？わたしたちが理解するのと1ヶ月の終わりとどっちが先に来るのか？

わたしは35年にわたって修行をしてきましたし、過去に特別接心に参加したこともありましたが、今回の経験はとても新鮮でした。研修所は人を得度してわたしたちの法系において中道を伝えていく者にとって価値のある場となるだろうと思います。

アメリカや日本のいろいろな団体に属し、今回の研修期間中に資料や指針を提供してくださった多くの人たちがいますが、彼らの果たした貢献のすべてに深く感謝いたします。彼らからの大きな貢献の結実の一つはわたしがこれまでよりもはるかに広い「仏法で結ばれた家族」とつよいつながりを持っていると感じられるようになったことです。これらの人々と出会ってわかったことは、彼ら自身が向上し、また伝道教師たちが向上するのを助けて、仏法が興隆するための力強い導き手になるようにと努力しているということでした。

瑞応寺の雲水さんたち、指導者のみなさん、運営担当者、宗務庁の国際課のみなさん、永平寺および総持寺のみなさんが、かれらのはらった努力がわたしたち研修生にとってどれほど大きな意味をもっていたかをどうかわかっていただきたいと思います。それはほんとうに人生で一度きりのものといえるような経験でした。そのおかげでどのようにしてわたしのところに修行がやって来たかについてはるかに理解することができました。

打坐をめぐる断想集 私の『坐禅参究帖』（十六）

藤田一照

《坐禅の全体》

これまで「坐禅の全体」という言葉を何度か使った。どうして「坐禅」で済まさずにわざわざ「全体」という言葉を付け足してこういう冗長な表現をしたかについて説明したい。結論からいえば、それによって坐禅の当体が「天地いっぱい」のものとしてあること、坐禅が我々の覚知の限界をはるかに越えて無限の広がりとも深さをもったものであることを強調したかったのだ。

「坐禅というものを紙に描いて示してみてください」というと、大抵のひとは人間が結跏趺坐で坐しているところだけを描くことだろう。これは、我々が「坐禅」ということを思い浮かべるときには、坐っている人間の肉体と外からは見えないがその中で展開しているその人の精神活動しか念頭にないことを示している。つまり「坐禅」を一個人の身心の活動としてのみとらえているということだ。ところが、道元禅師のとらえる坐禅はそういう人間の「個人技」ではないのだ。一人の人間がぼつんと「宇宙の片隅に閉じこもって小康を楽しんでいるような」（沢木興道老師の表現）矮小なものではない。だから、道元禅師にそういう絵をみせれば、「これではまったく不十分。坐禅の全体像を描いたものとは到底言えない。」といわれることだろう。

道元禅師の著述のなかには、「盡十方界」とか「盡一切」、「盡大地」、「盡乾坤」、「盡地・盡界・盡時・盡法」といった計量しえない無限の広さと深さを表す「盡」という語がしばしば見られる。道元禅師が「坐禅」という時、その坐禅は、実はこういう広大無辺の「盡」というスケールにおいて語られているのだ。例えば、『正法眼蔵 唯仏与仏』には、「仏の行は盡大地とおなじくおこなひ、盡衆生ともにおこなふ。もし盡一切にあらぬは、仏の行にてはなし。」という一節がある。このなかの「仏の行」は「坐禅」と置き換えてみることができる。（「坐は仏行なり」）すなわち仏行としての坐禅とは、「盡一切の坐禅」でなければならないということだ。

往々にして我々は、メイメイ持ちの自分だけが、悟りを得、安心を得ようとして坐禅をする。そして、「求道」あるいは「修行」という名目のもとに、メイメイ持ちの自分が個人的な内面の苦悩を云々し、それを解決するために「こころの工夫」に血道をあげ、ますます狭い煩瑣な世界にのめり込んでいく。そこでは「盡一切」などという発想は初めからない。それは「吾我」から出発して「吾我」に帰着するような自己愛的（ナルシスティック）な営みというしかない。しかし、沢木興道老師がいうように「メイメイ持ちの何かが少しでもあれば純粹無垢でマジリ気のない坐禅にはならない」のだから、そのような自己閉鎖的な修行をいくら熱心にやってもそれを坐禅ということとはできないのだ。そ

れは坐禅が坐禅であるためには妥協の許されない厳しい条件である。

さて、「仏の行＝坐禅＝盡一切」という坐禅の基本公式からすれば、坐禅の図には、坐禅している一個人の身心だけでなくそれを含んだ全世界（「盡大地」、盡衆生・・・）が描かれなければならないことになる。以前にふれた「釈尊成道の図」には、坐禅している釈尊だけでなく、大地や木や空や星などそれをとりまく世界が描きこまれている。「盡一切」を描き尽くすことなど実際には不可能なことだから、完璧な坐禅の図を描くことは無理なのだが、それでもこの「成道図」は坐禅の図としてかなりいい線を描いているといえるだろう。ところが、我々は往々にしてこの図の中の釈尊の姿にのみ注目してそれだけを「坐禅」と考え、その他の部分は坐禅の単なる舞台であるかのようにみなしがちだ。つまり釈尊が「図柄」、その他は「背景」、「地」として対照的に見て、その「図柄」だけが坐禅であると解するのだ。しかしこの成道図の正しい鑑賞法は、そういう「図」（いわゆるの坐禅）と「地」（坐禅でないもの）という二分法的見方ではなく、全体を一つに観るもっとホーリスティック（全体論的）な見方なのではなかろうか。つまり、この図に描かれていることのすべて、この図の全体がそのまま「坐禅そのもの」であると見るのである。釈尊が成道された時に発されたといわれている「我と大地有情と同時成道」という言葉はそのことを傍証してくれていると思われる。つまり、釈尊が成道された時、その結跏趺坐はもはや釈尊個人のものではなく、「三千大千世界の虚空に遍満」（『大品般若経』）した「無限の坐」であったということだ。

釈尊が行じられた坐禅が、「盡一切」を排除した個人的営みではなく、「盡一切」をその内容とするような坐禅であったとするなら、その門下である我々としては、本当ならもっと雄大で無限なスケールの「坐禅の図」を構想することができなくてはならない。そして、釈尊の坐禅がそうであったように無限に向かってどこまでも開かれていくような坐禅を学ぶのでなくてはならないはずだ。だが今のところ、坐禅の「図」にしても「行」にしても、小さく限定された個人大のスケールにとどまったものが多いように思われる。だからそういう常識的にイメージされる有限な坐禅と区別するためにわざわざ「坐禅の全体」というあらずもがなの表現をせざるを得なかったのだ。

くどくなるが、この辺の問題を「魚と水」の例でもう少し考えてみたい。本物の生きた魚はそれがその中を泳いでいる水から切り離すことはできない。水とともにあってこそ活潑潑地（かっぱつぱち びちびち躍り跳ねる生きのよいさま）に泳ぎまわる生きた魚といえるのだ。だから、魚をその生きた姿のままとらえようとするなら、魚だけでなく、魚と水を含む全体をみるべきなのである。しかし、その場合でも、泳ぐ「魚」とその環境としての「水」というふうに、魚と水をまずわけてからその組み合わせとして全体を見ているならば、それはもうすでに分別の立場に落ちているといわなくてはなるまい。そうではなくて、まずあるのは継ぎ目のない「一枚の全体」なのであって、いわゆる「魚」と「水」はそれを便宜的に

分節したもので、それぞれ異なる相貌と機能を持つので我々にはあたかも独立した二つのものがあるかのようにみえるのだ。（「魚行いて魚に似たり」『正法眼蔵 坐禅箴』）だから、こういう継ぎ目のない全体そのもの（もちろん、それは動きのない固定的なものではなく、魚は泳ぎ水は流れる、そういう絶えず変化流動を続ける動的なものである）が「魚の全体」なのであり、あるいはもっと端的にその全体を一言で「魚」とよぶべきなのだ。

我々が日頃やっているように個体としての魚だけに注目するのは、水の外にとりだされて死んだ干物を相手にしているようなものなのだ。（「魚もし水をいづればたちまちに死す。以水為命しりぬべし」『正法眼蔵 現成公案』）そういう水抜き魚はあくまでも抽象化された魚なのであって、宏智禅師の『坐禅箴』にある「水清徹底兮、魚行遅々」という句が示すような、無辺際の水の中で悠々と泳ぎ続ける本物の魚とは程遠い、我々の観念のなかにしか存在しない架空の魚でしかない。だから、「水清徹底兮、魚行遅々」というこの句全体がリアルな魚の当体を表現していると理解すべきなのである。

坐禅を、坐っている一人の人間の身心の活動のみに限定して考えることは、魚を水からとりだして考えるのと同じことであって、坐禅を抽象化してとらえることに他ならない。そこで我々が見るのは干物になった死んだ坐禅の姿だけで、いのちの通ったみずみずしい坐禅の本来の姿は見失われてしまう。魚にとって水に当たるものは、坐禅においては我々の身心を取り巻く「盡一切」である。だから抽象化されない生のリアルな坐禅の当体とは、坐禅している我々の身心と「盡一切」からなる無限大の全体であるという他はないのだ。

知覚心理学が教えているように、我々の覚知できる範囲はかなり限られたものでしかない。たとえば我々人間が音として覚知できるのは振動数が一秒間に二十回位の低い音から一秒間に二万回の高い音の間に限られているという。この範囲外の音は我々には覚知できないので、我々にとっては存在しないも同然だが、それはそういう音が存在しないということではない。そういう音を覚知できる動物もいるし、なんらかの機械を使って間接的にその音を検出することもできるからだ。このように地平線（そこから先は覚知が届かない限界線）を本質的に持っている我々の有限なる覚知によって、無限大である坐禅の全体をとらえ切れることは、当然のことながら不可能なことなのだ。どんなに覚知を働かせてもそこでとらえられたものは、坐禅の「部分」「側面」「一面」でしかない。

道元禅師はその著述の中で、我々の覚知の限界性・部分性・一面性についていろいろ論じておられる。たとえば『普勧坐禅儀』に「警地之智通 べつちのちつう」という言葉がある。「警地」というのは「ちらっとみること」で我々の覚知はいかにがらばっても、坐禅の全体に対しては「警地」の闕を出ないということだ。だから道元禅師はこの言葉によって、坐禅によってなにか素晴らしいものを「ちらっと見た」くらいで有頂天にな

ると、それにとらわれて身動きできないような羽目に陥いるから気をつけよと注意をうながしておられるのだ。それがどのように深遠高尚な洞察、繊細微妙な覚知であったにしても（それはそれで貴重なものであるが・・・）、それは人間が人間であることからくる限定を被っており、部分的・一面的であることをまぬかれ得ないのだ。

もちろん我々は訓練によって覚知の範囲をある程度広げることができる。それが坐禅の目的ではないが、坐禅が深まってくれば、その副産物(?)としてそれまで覚知の対象にはならなかったことをいろいろとらえられるようにはなってくる。しかしそれとても坐禅の全体のほんの一部なのだということを忘れてはならない。

（「参学眼力のよぶばかりを見取会取するなり。・・・のこのり海徳山徳おほくきはまりなく、よもの世界あることをしるべし。」『正法眼蔵 現成公案』）

坐禅の全体は覚知よりもはるかに広く深い。たとえば、前に述べた自分の「脳脊髄液の流動」それ自体は覚知の直接的対象にはならない。それは身体各部の微細な動きを通して間接的に覚知されるのみである。脳脊髄液は当人の意識には全く知られないままに、その人間が生きているかぎり流動を続け、覚知という生理的機能そのものを可能にしているのだ。「坐禅」といった場合に、我々は「覚知によってとらえられる範囲」にのみ注目しそこに重心をかけがちだ。しかし、実は「脳脊髄液の流動」のように、「覚知によっては決して対象的にとらえられないが、確かに存在して、覚知を支えている世界」が覚知の外（背後？）に広大無辺に広がっているのだ。そのことに思いをいたさなくては「葦の髄から天井を覗く」愚を犯すことになる。

「坐禅の全体」、端的に言って「坐禅」とは覚知によってはかりしることのできない何かという他はない。（葉山禅師はそこを

「千聖もまた知らず」と言われた）しかし、正しく坐禅しさえすれば、覚知を越えたところで無限の全体がなんの留保もなく現成しているのだ。（「もし人、一時なりといふとも、三業に仏印を標し、三昧に端坐するとき、遍法界みな仏印となり、尽虚空ことごとくさとりとなる」『弁道話』）我々は坐禅に精出しているかぎりこの全体の外に出てそれを眺めることはできない。だから坐禅しながら坐禅の全体を見とどけることはできないのだ。そういう不可能な企てに気をまわさず、安心してすべてを坐禅に打ち任せてその全体につきこんでいくこと、つまりいまこの坐禅が坐禅になるようにその工夫をただ専心に続ければ充分なのだ。それが「只管打坐」といわれるゆえんだ。

余談になるが、坐禅についてよく言われる「身心脱落」、「脱落身心」ということもこの文脈で理解できないだろうか。つまり、「身心脱落」とは、これまでメイメイの持ちものとして個人的・私的・限定的に使われていた身心が、坐禅においてそういう束縛から解放されて、宇宙的・公的・無限なものになっているという事実の描写であり、またそれに対する気づきの言葉でもある。体験的に言えば、私の身心（＝図柄）と周りの世界一切（＝地）という二分法的ながめが脱落して、身心と盡一切世界とが一枚になった無限大の広がり（もちろんその果てを見届けることはできない）として感得されるのである。「脱落身心」とはこうして身心脱落した「それ」（禅語では「恁麼 いんも」）がいまここで身心として活き活きと働いているという、同じ事実のもう一つの側面の描写であり、その自覚の言葉でもある。体験的に言えば、無限な全体がいまここに具体的身心となって展開している出来事として身心が感得されるのである。いずれも坐禅において現成している非覚知の事態の描写であると同時に、覚知がそれに「開けた」時の体験を表す言葉なのである。どちらにしても、身心が無限の全体に摂取され、そういう身心として働いている坐禅のありようを端的にとらえた有り難い言葉である。

国際ニュース

◎2005年10月9日—11月8日 伝道教師研修所が日本の愛媛県新居浜市にある瑞応寺で開所されました。北アメリカから4名、ヨーロッパから3名が参加。

海外での行事

ヨーロッパ曹洞禅会議

場所：La Gendronniere, 禅道尼苑
ブローワー フランス

期日：1月21, 22日

北アメリカ曹洞禅会議・研修会

場所：両大本山別院禅宗寺
カリフォルニア州ロサンゼルス

期日：3月11, 12日